

3.3 階数の幾つかの定義とその同値性

定義 3.6 4 種類の階数 (rank) を定義しよう。 $A = (a_{ij})$ を (m, n) 行列とする。行列の i 列を縦ベクトルと見たものを $\mathbf{a}_i = (a_{ij})$ と書き、行列 A は縦ベクトル \mathbf{a}_j を横に並べたものと考え、 $A = (\mathbf{a}_1 \mathbf{a}_2 \cdots \mathbf{a}_n)$ と書き表す事ができる。行列の j 行を横ベクトルと見たものを $\mathbf{a}^*_j = (a_{ij})$ と書き、

行列 A は横ベクトル \mathbf{a}^*_i を縦に並べたものと考え $A = \begin{pmatrix} \mathbf{a}^*_1 \\ \mathbf{a}^*_2 \\ \vdots \\ \mathbf{a}^*_m \end{pmatrix}$ と書き表す事ができる。

- (1) 行列 A に基本変形を行ない対角成分以外を 0、対角成分を 0 または 1 にした時の 1 の個数を $\text{rank}_1(A)$ と表す。
- (2) $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n\}$ のなかの 1 次独立なベクトルの個数の最大値を $\text{rank}_2(A)$ と表す。
- (3) $\{\mathbf{a}^*_1, \dots, \mathbf{a}^*_m\}$ のなかの 1 次独立なベクトルの個数の最大値を $\text{rank}_3(A)$ と表す。
- (4) $I(A) = \{\mathbf{y} \in \mathbf{K}^m \mid \mathbf{y} = A\mathbf{x}, \mathbf{x} \in \mathbf{K}^n\}$ の次元 $\dim I(A)$ を $\text{rank}_4(A)$ と表す。

定理 3.7 定義 (1), (2), (3), (4) は同じもの。

つまり、 $\text{rank}_1(A) = \text{rank}_2(A) = \text{rank}_3(A) = \text{rank}_4(A)$ である。よってこの定理が証明された後はこれを $\text{rank}(A)$ と表す。

$A_0 = \begin{pmatrix} E_r & O \\ O & O \end{pmatrix}$ に対し定理 3.7 が正しいのは明らかであろう。だが、一般の場合に定理 3.7

を証明するためには基本変形の性質を調べる事が必要になる。しかし、 $\text{rank}_2(A) = \text{rank}_4(A)$ はその知識がなくても証明できるので、それを最初に補題として証明しておく。

補題 3.8 $\text{rank}_2(A) = \text{rank}_4(A)$ が成立する。

証明 $A = (a_{ij}), \mathbf{a}_j = (a_{ij}), \mathbf{e}_j = (\delta_{ij})$ と置くと、 $\mathbf{a}_j = A\mathbf{e}_j$ より、 $\mathbf{a}_j \in I_A$ 。ここで、 $\text{rank}_2(A) = r$ とする。 $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_r$ が 1 次独立としても一般性を失わない。 $\mathbf{a}_k (k > r)$ に対し、 $\{\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_r, \mathbf{a}_k\}$ は 1 次独立ではない。よって $\mathbf{a}_k = \beta_{k1}\mathbf{a}_1 + \dots + \beta_{kr}\mathbf{a}_r$ と表わすことができる。任意の $\mathbf{w} \in I_A$ に対し、 $\mathbf{w} = \alpha_1\mathbf{a}_1 + \dots + \alpha_r\mathbf{a}_r$ と書ける事を示せば、 $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_r$ が I_A の基底となり、 $\text{rank}_4(A) = \dim I_A = r = \text{rank}_2(A)$ がいえる。 \mathbf{w} に対し $\mathbf{x} \in \mathbf{K}^n$ が存在して、 $\mathbf{w} = A\mathbf{x}$ となる。 $\mathbf{x} = x_1\mathbf{e}_1 + \dots + x_n\mathbf{e}_n$ と書けるので、

$$\begin{aligned} \mathbf{w} &= A\mathbf{x} = A(x_1\mathbf{e}_1 + \dots + x_n\mathbf{e}_n) = x_1A\mathbf{e}_1 + \dots + x_nA\mathbf{e}_n \\ &= x_1\mathbf{a}_1 + \dots + x_r\mathbf{a}_r + x_{r+1}\mathbf{a}_{r+1} + \dots + x_n\mathbf{a}_n \\ &= x_1\mathbf{a}_1 + \dots + x_r\mathbf{a}_r + x_{r+1}(\beta_{r+11}\mathbf{a}_1 + \dots + \beta_{r+1r}\mathbf{a}_r) + \dots + x_n(\beta_{n1}\mathbf{a}_1 + \dots + \beta_{nr}\mathbf{a}_r) \\ &= (x_1 + x_{r+1}\beta_{r+11} + \dots + x_n\beta_{n1})\mathbf{a}_1 + \dots + (x_r + x_{r+1}\beta_{r+1r} + \dots + x_n\beta_{nr})\mathbf{a}_r \end{aligned}$$

となり, よって補題は示された。 ■

定理 3.7 を示すために次の補題を示す。

補題 3.9 P, Q を基本行列とする時,

$$\begin{aligned}\text{rank}_2(QA) &= \text{rank}_2(AP) = \text{rank}_2(A) \\ \text{rank}_3(QA) &= \text{rank}_3(AP) = \text{rank}_3(A)\end{aligned}$$

が成立する。

略証 同様にできるので, $\text{rank}_2(QA) = \text{rank}_2(AP) = \text{rank}_2(A)$ だけ証明する。 $\text{rank}_2(A) = r$ とすると, a_1, \dots, a_r が 1 次独立としても一般性を失わない。この時 Qa_1, \dots, Qa_r が 1 次独立である事を示す。 $\alpha_1 Qa_1 + \dots + \alpha_r Qa_r = o$ とすると $Q(\alpha_1 a_1 + \dots + \alpha_r a_r) = o$ なので Q^{-1} を両辺にかけると $\alpha_1 a_1 + \dots + \alpha_r a_r = o$ 得る。これより $\alpha_1 = \dots = \alpha_r = 0$ 。よって $\text{rank}_2(QA) \geq \text{rank}_2(A)$ である。同様の議論を Q に代えて Q^{-1} を用いることにより $\text{rank}_2(QA) \leq \text{rank}_2(A)$ を得るので $\text{rank}_2(QA) = \text{rank}_2(A)$ は成立する。

$AP = (b_1 \cdots b_n)$ とおく時, 次の 3 つの場合について示せばよい。

(1) $P = P_n(k, \ell)$ の時,

$$b_1, \dots, b_k, \dots, b_\ell, \dots, b_n = a_1, \dots, a_\ell, \dots, a_k, \dots, a_n$$

(2) $Q_n(k; \lambda)$ の時,

$$b_1, \dots, b_k, \dots, b_n = a_1, \dots, \lambda a_k, \dots, a_n$$

(3) $R_n(k, \ell; \alpha)$ の時,

$$b_1, \dots, b_k, \dots, b_\ell, \dots, b_n = a_1, \dots, a_k, \dots, \alpha a_k + a_\ell, \dots, a_n$$

(1), (2) は明らかに 1 次独立なベクトルの最大個数は同じであるので $\text{rank}_2(AP) = \text{rank}_2(A)$ は成立する。(3) の場合最初に $\text{rank}_2(AP) \geq \text{rank}_2(A)$ を証明する。 $\text{rank}_2(A) = r$ とし $\{a_{\alpha(1)}, \dots, a_{\alpha(r)}\}$ が 1 次独立であるとする。 $\alpha(\ell') = \ell$ となる ℓ' が存在しない時は $\{b_{\alpha(1)}, \dots, b_{\alpha(r)}\}$ も 1 次独立である (実際同じもの)。よって 1 次独立なベクトルの組は必ず a_ℓ を含んでいる事を仮定する。 $\alpha(\ell') = \ell$ となる ℓ' が存在する時は $\ell' = r$ としても一般性を失わない。 $\{a_{\alpha(1)}, \dots, a_{\alpha(r-1)}, a_\ell\}$ が 1 次独立であるとする。 $a_k = \alpha_1 a_{\alpha(1)} + \dots + \alpha_{r-1} a_{\alpha(r-1)}$ と書けないとき, $\{b_{\alpha(1)}, \dots, b_{\alpha(r-1)}, b_k\}$ が 1 次独立になり仮定に反する。 $a_k = \alpha_1 a_{\alpha(1)} + \dots + \alpha_{r-1} a_{\alpha(r-1)}$ と書けるとき $\{b_{\alpha(1)}, \dots, b_{\alpha(r-1)}, b_\ell\}$ は 1 次独立である。よって $\text{rank}_2(AP) \geq \text{rank}_2(A)$ が分かる。 $a_\ell = -\alpha b_k + b_\ell$ なので, a_i と b_i の役割を入れ替えることにより $\text{rank}_2(AP) \leq \text{rank}_2(A)$ が得られるので証明は終わる。 ■

定理 3.7 の証明 命題 3.5 より行列 A に対し基本行列 $P_1, \dots, P_t, Q_1, \dots, Q_s$ が存在して

$$A = Q_s \cdots Q_1 A_0 P_1 \cdots P_t$$

と書ける。ただし $A_0 = \begin{pmatrix} E_r & O \\ O & O \end{pmatrix}$ 。この時 $\text{rank}_1(A) = \text{rank}_1(A_0) = r = \text{rank}_2(A_0) = \text{rank}_3(A_0)$ が成立する。補題 3.9 を順に適用することにより

$$\text{rank}_2(A_0) = \text{rank}_2(AP_1) = \dots = \text{rank}_2(AP_1 \cdots P_t) = \text{rank}_2(Q_1 AP_1 \cdots P_t) = \dots = \text{rank}_2(A)$$

を得る。 $\text{rank}_3(A)$ についても同様にできるので O.K. ■

正方行列に関して階数と正則性の間には次の関係がある。

命題 3.10 A が n 次行列のとき, A が正則 (逆行列を持つ) である必要十分条件は $\text{rank}(A) = n$ である。

証明 $A = (\mathbf{a}_1 \dots \mathbf{a}_n)$, $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$ とする。

A が正則のとき $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$ が 1 次独立である事を示せば, $\text{rank}(A) = n$ が分かる。 $x_1\mathbf{a}_1 + \dots + x_n\mathbf{a}_n = \mathbf{0}$ が成立しているとする。このとき $A\mathbf{x} = \mathbf{0}$ なので A^{-1} を両辺にかけると $A^{-1}A\mathbf{x} = A^{-1}\mathbf{0}$ より $\mathbf{x} = \mathbf{0}$ が分かる。

$\text{rank}(A) = n$ とすると $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$ は 1 次独立である。このとき $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$ はベクトル空間 K^n の基底である。このとき任意のベクトル \mathbf{b} に対しスカラー x_1, \dots, x_n が存在して $\mathbf{b} = x_1\mathbf{a}_1 + \dots + x_n\mathbf{a}_n$ と書ける。特に \mathbf{b} として基本ベクトル $\mathbf{e}_1, \dots, \mathbf{e}_n$ 達をとってくる。即ち各 i ($i = 1, \dots, n$) に対しスカラー b_{i1}, \dots, b_{in} が存在して $\mathbf{e}_i = b_{i1}\mathbf{a}_1 + \dots + b_{in}\mathbf{a}_n$ が成立する。 $B = (b_{ij})$ とおいて行列で書き直すと $E = BA$ を意味している。よって B は逆行列⁽¹⁾。 ■

演習問題 3.3 次の行列の階数を求めよ。

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 1 & 0 & 1 & 0 & 1 \\ 2 & 0 & 2 & 0 & a \\ 1 & 0 & 1 & 0 & b \end{pmatrix}$$

⁽¹⁾本来なら $AB = E$ も示す必要がある。実は $BA = E$ から $AB = E$ が出て来るのだが, これは次の章で扱う。